受難節第三礼拝
２０２３年3月１２日（日）
題　「権力者ヘロデとピラトの元でのイエスの死」
テキスト：ルカによる福音書２３章１～１２節

皆さん、おはようございます。

今日の宣教の題は少し分かりにくい題となりましたが、
キリスト者が主と信じるイエスは約２０００年前、当時のユダヤ地方の権力者であったピラトとヘロデ王の元で十字架につけられ死を向えたのです。

ご一緒に聖書のことばを学びましょう！
今日の個所は、イエスがピラトから尋問される場面と、ヘロデから尋問される場面です。
「◆ピラトから尋問される」。ピラトとは、わたしたちが礼拝の信仰告白、使徒信条にも出て来ているように。「ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられ、死んで葬られ、よみにくだり、三日目に死人のうちからよみがえり、天にのぼられました。」とあります。そのポンテオ・ピラトのことです。時代はかの世界帝国だったローマ帝国の時代です。地中海近辺はすべてローマ帝国の皇帝の支配下にありました。この時、ユダヤ地方は、ローマ帝国の支配下にありローマ帝国の属州となって支配されていたのです。その為、多くのユダヤ人は心の中ではローマ人を良く思っていませんでした。むしろ憎んでいた人が多かったようです。でも声を上げると反乱のかどで逮捕されるので人々はローマに従うしかなかったようです。しかし、中にはローマに反抗する人々もいたのです。
ちなみにローマ帝国以前はユダヤ地域はユダヤ人と関係の深い、王によって治められていました。イエスが生まれた時は、ヘロデ大王で聖書にも出てきます。彼は旧約聖書に出てくる、族長ヤコブの兄エソウの末裔とされるエドム人の末裔でした。ユダヤ地方の王でしたが、純粋なヤコブの末裔としてのユダヤ人ではなく、時のローマ権力に取り入って王の地位を確保していたようです。

ヘロデ大王亡き後、ユダヤ地方は三つに分割され、3 人のヘロデ大王の子どもたちが、分割して治めていたのです。宗教はおおむねユダヤ教でした。そして北のガリラヤ地方を治めたのが、今日の聖書に出てくるヘロデです。正式な名前はヘロデ・アンティパスといい、洗礼者ヨハネから批判されてヨハネを殺し

た人物です。ちなみにガリラヤ地域は、歴史的経緯、偏見もあり、エルサレムの町があるユダヤの中心地域からは差別されていた地域だったようです。
　今日登場している、ローマ総督ピラトとガリラヤの王ヘロデでは、ピラトの方が圧倒的に権力は上だったのです。しかし、ヘロデもガリラヤの王として父はユダヤ全土の王でもあり、腹の中では支配者ローマを良く思っていなかったようです。ですから今日の 12 節にあるように「12:この日、ヘロデとピラトは仲がよくなった。それまでは互いに敵対していたのである。」という言葉が真実を表しています。
神の子イエスを仲立ちとして、敵対関係にあったヘロデとピラトは仲がよくなったのです。これは古代のこの地域だけのことではなく、歴史の現実の中、国家の間でも、地域や、社会の人間関係、人の集まる所どこであれ起こり得ることだと思うのです。その原因はわたしたち人間は、誰でも自分を中心におきたいからだと思います。それゆえ、置かれた状況の中で利害が一致すると敵対関係から協力関係になることもあるのです。それゆえ、歴史を正しく学び、知ることは大切ななことだと思えます。

さて聖書によると、
　1:そこで、全会衆が立ち上がり、イエスをピラトのもとに連れて行った。
　2:そして、イエスをこう訴え始めた。「この男はわが民族を惑わし、皇帝に税を納めるのを禁じ、また、自分が王たるメシアだと言っていることが分かりました。」と。最高法院で裁判を受けたイエスは、総督ピラトの元に連れて行かれました。
ここで「この男はわが民族を惑わし、皇帝に税を納めることを禁じ、また、自分が王たるメシアだと言っている」とかの言葉は、イエスは言っておられないのです。これはイエスをローマ皇帝からユダヤに派遣されている総督ピラトに訴えてイエスを陥れるための偽りの罪状なのです。ユダヤの小さくされた民衆が慕うイエスを良く思っていない、時のユダヤ教の最高権力者であった大祭司を始め、ファリサイ派の律法学者たち、また政治に関わるサドカイ派の人々の思う所でもあったのです。

　3:そこで、ピラトがイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問すると、イエスは、「それは、あなたが言っていることです」とお答えになった。
　4:ピラトは祭司長たちと群衆に、「わたしはこの男に何の罪も見いだ

せない」と言った。
5:しかし彼らは、「この男は、ガリラヤから始めてこの都に至るまで、ユダヤ全土で教えながら、民衆を扇動しているのです」と言い張った。

「扇動」という言葉は、「ものを上下にゆさぶる」「ゆさぶって混乱させる」という意味で使われているようです。
神の子イエスは、この時、ローマ皇帝の権力（総督ピラト）と、地域の王（ヘロデ・アンティパス）そしてユダヤ教の大祭司（カヤパ）に代表される、この世の、三つの権力（武力を持つ国家・政治権力・宗教的勢力の権力）のまっただ中にあったのです。そのまわりに多くの名もない民衆がいます。聖書によれば民衆の中には権力者たちに扇動されて「イエスを十字架につけよ。」と叫んだ人々もいたようです。

その後、イエスはヘロデ王からも尋問されました。
◆ヘロデから尋問される
6:これを聞いたピラトは、この人はガリラヤ人かと尋ね、
7:ヘロデの支配下にあることを知ると、イエスをヘロデのもとに送った。ヘロデも当時、エルサレムに滞在していたのである。
ピラトは、イエスがガリラヤ出身と聞いて、ピラトも、本心ではイエスの十字架とかかわりたくなかったのかもしれませんが、自分の総督としても地位を確保するためだったのかイエスを尋問します。ちなみにピラトは後にローマ皇帝命でユダヤ総督を辞めさせられています。
その時、総督ピラトはちょうどガリラヤの王ヘロデがエルサレムに来ていることを知っていたようで、イエスをガリラヤ地域の王ヘロデに引き渡します。そこでイエスはヘロデ王と向かい合ったのです。
8:彼はイエスを見ると、非常に喜んだ。というのは、イエスのうわさを聞いて、ずっと以前から会いたいと思っていたし、イエスが何かしるしを行うのを見たいと望んでいたからである。
ヘロデ王は、イエスに以前から合いたいと思っていたようです。
そしてイエスの行うしるし、奇跡を見たいとの思いを持っていたようです。
9:それで、いろいろと尋問したが、イエスは何もお答えにならなかった。
ヘロデはイエスを尋問しますが、イエスは黙ったままです。この自分の質問に答えないということで、ヘロデ王は激怒したのかもしれません。洗礼者ヨハネを死に追いやったヘロデは、自分の面子をとても気にする人物だったようです。

その時、
10:祭司長たちと律法学者たちはそこにいて、イエスを激しく訴えた。
ので、ヘロデはそれに同調して、イエスをピラトに送り返したのです。
11:ヘロデも自分の兵士たちと一緒にイエスをあざけり、侮辱したあげく、派手な衣を着せてピラトに送り返した。
ピラトもヘロデも、イエスに関わりたくないという自己保身では一致していたのです。この時イエスの愛した弟子たちの姿は見えません。どうしていたのでしょうか？
誰がイエスを十字架につけたのか？ローマ式の処刑方法である十字架に追いやったのでしょうか。イエスは、あたかも、たらいまわしされるかのように十字架への道を強制されたのです。
ここには、責任をとろうとしない人間の自己保身、エゴイズムが、人間の闇、人間の罪が、罪なき神の子イエスを十字架につけたのだと思います。時を超え決してわたしも、わたしたちも他人ごとではない思いにならされます
「12:この日、ヘロデとピラトは仲がよくなった。それまでは互いに敵対していたのである。」人間の醜い、でも確かに存在する闇の人間関係を突き付けられる思いがします。

しかし、 罪なき神の御子イエスを用いての神の救いの計画は、人間の罪のただ中を進んで行ったことを思います。イエスは黙々と、苦難を受けつつ、ただ神に目を向け、神のみに従われたのです。
そのことによって、そのことによってのみ、わたしたち人間の罪の赦しはなったのです。暗闇に光は灯ったのです。ですから私たちはこの世に生かされている限り、善き力である神の愛を受けつつイエスにあってどんな時でも誠実でありたいと願うのです。

皆様の上に主の平安を祈ります。共に黙想しましょう。